

Title	「さまようこと」の意味：『間違いの喜劇』試論
Author(s)	柴田, 正樹
Citation	Osaka Literary Review. 26 P.40-P.52
Issue Date	1987-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25547">https://doi.org/10.18910/25547</a>
DOI	10.18910/25547
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「さまようこと」の意味

——『間違いの喜劇』試論——

柴田正樹

『間違いの喜劇』の眼目は、容姿も名前も服装までも同じ二組の双子が取り違えられることによって生ずる混乱にある。この劇の粉本とされる Plautus の『メナエクス兄弟』では取り違えられる双子は一組だったが、Shakespeare はさらに一組を加え、しかも実に完璧な人違いを描いてみせた。と言っても、この完璧さ、鮮かさは取り違えにつきまとう難点を物語の中で一つ一つ合理的に解決して得られたものではなく、逆に登場人物の反応を単純化することによって実現したものである。例えば、Antipholus 兄の妻 Adriana は弟の方を夫と間違えるのだが、弟の当惑があれほど激しいのに、彼には夫としての義務を果すようにと型通りの対応をするだけで、彼が夫と違うのではないかという疑問は一沫も抱かない。Adriana が嫉妬で興奮していたとしても、冷静な彼女の妹 Luciana ならば、その点に気がついても良かっただろう。ところが彼女にさえ義兄であるはずの人物が、なぜ奇妙な態度をとるのか、その内面・心理を理解し、通じ合おうとする様子がないのである。と言うより、そんなことなど彼女はまるで問題にしていな

If you did wed my sister for her wealth,  
Then for her wealth's sake use her with more kindness ;  
Or if you like elsewhere, do it by stealth,  
Muffle your false love with some show of blindness.  
Let not my sister read it in your eye ;  
Be not thy tongue thy own shame's orator ;  
Look sweet, speak fair, become disloyalty ;  
Apparel vice like virtue's harbinger ;

Bear a fair presence, though your heart be tainted ;  
 Teach sin the carriage of a holy saint,  
 Be secret false ; what need she be acquainted ?  
 What simple thief brags of his own attain ?  
 'Tis double wrong to truant with your bed,  
 And let her read it in thy looks at board ;  
 Shame hath a bastard fame, well managed ;  
 Ill deeds is doubled with an evil word.  
 Alas, poor women, make us but believe  
 (Being compact of credit) that you love us ;  
 Though others have the arm, show us the sleeve . . . . 1)

(III. ii. 5-23)

表面的に夫婦関係が円滑に機能するなら内面は問題にならない。人間関係において実質よりも形相・役割が重視される。Shakespeare は取り違えられる本人らと最も近い関係にある登場人物たちからすら人間の内面への視線を排除してしまった。そして、彼らの反応を単純化することで大団円に至るまでその思い込みを完全なものとするのができたのである。勿論、このことによって『間違いの喜劇』がある種の深みを失っていると言うことはできるのだが、けれどもこの機能主義的な単純さは思いの他、問題をはらんでいるように思われる。

実質よりも形相を重視する態度、内面のつながりよりも関係の円滑さを優先する態度は Ephesus を舞台にこの劇に描かれた人間関係の特徴であり、そのことは登場人物が法や制度の規定に何よりも忠実であるという事実にも最も良く示されている。この劇がまず我々に伝えるのは、Syracuse と Ephesus の通商関係上の対立の故に報復措置としてできた苛酷な法の存在である。Ephesus の統治者たる公爵は、この法に従い Syracuse の商人であるというだけで Antipholus 兄弟の父 Egeon を死刑にしなければならぬ。もっとも高額のコロを支払えば死刑は免がれるのだが、Ephesus に身寄りのない Egeon にそのあてはなかった。登場人物の中で最も人間味のある公爵は何とか彼を助けてやりたいと思うものの、Richard II のように

決められたことを気まぐれに変えることはできない。

Now trust me, were it not against our laws,  
Against my crown, my oath, my dignity,  
Which princes, would they, may not disannul,  
My soul should sue as advocate for thee . . . (I. i. 142-145)

一幕一場にはEgeonを襲う圧倒的な死の影が感じられるが、死が圧倒的なのは、それを規定している法が王権でさえ揺がすことのできない力を持っているからなのである。

法への絶対的服従は、人違いの混乱の末に首飾りの代金を払わないと不当に逮捕される Antipholus 兄が、にもかかわらず警吏に向かって

I do obey thee, till I give thee bail. (IV. i. 81)

と従順な態度を示す部分にも明らかだろう。また、Adriana が夫を家に連れて帰ろうと彼を警吏からむりやり奪おうとすると、当の本人は

Thou jailor, thou,  
I am thy prisoner; wilt thou suffer them  
To make a rescue? (IV. iv. 107-109)

と言い、警吏は

He is my prisoner; if I let him go  
The debt he owes will be requir'd of me. (IV. iv. 115-116)

と言うのだが、いずれのセリフも二人の意識が奇妙に法的規定に囚われていることを示している。主人にへらず口ばかりたたいている Dromio 弟にしても

For servants must their masters' minds fulfil. (IV. i. 114)

と、社会を組織化している制度や規則、それによって規定される人間関係のあり方を踏みはずすことは決してないのである。

Ephesus 社会の人間関係を構成するものとして、法の他に商業取引きを見逃すことはできない。すでに指摘されているように、舞台には直接あらわれないものの、この劇は一方に市場の存在を、他方に港の存在を強く感じさせる。<sup>2)</sup> すなわち Ephesus は商業都市であり、実際、舞台に登場す

る商人は商用のため忙しく飛び回っている。Ephesus の人間は契約によっても関係を結び合っており、この劇で頻繁に行なわれる首飾りとか金といった物品の交換は、この契約による関係性という特徴を視覚化した表現だと言えるだろう。

しかも契約は法と同じくらい強い拘束力を持ち、これに違反することはできない。違反すると情が介在する余地なく厳罰が与えられる。ささいなものながら、この劇にたびたび見られ、特徴の一つとも言える暴力は、ルールに違反した時に生じる制裁である。Dromio 兄弟は主人の命令を良く守っているのだが、人違いが災いして、いつも言い付けを守っていないように思われ、殴られる。四幕一場の冒頭、商人は Angelo から金を取りたてるのに、いきなり役人を同行してくる。商人が何度も催促したのに Angelo が金を払わないというのであれば、役人を連れてくるのは理解できるが、彼は今まで一度も催促はしていない。支払い期日が過ぎているとはいえ、突然すぎはしないだろうか。恐らくこの唐突さはルールの厳しさを印象づけるための演出なのであろう。ルールの背後には常に脅しがある。Dromio 弟の警吏に対する発言は端的にこのことを示している。

Ay, sir, the sergeant of the band ; he that brings  
any man to answer it that breaks his band. . . (IV. iii. 29-30)

警吏は悪人を捕えるための、社会の健全さを維持するための存在ではない。ルール違反を取り締まるための存在なのである。このように、ここにあるのは情によるつながりというより、法や契約といった外的な規則によって形成される表層的な人間関係である。

Ephesus は関係性の強い社会だ。それを構成する人間は、極端に言えば、法や契約によって生ずる関係のネットワークの項にすぎない。項にとって大切なのはネットワークが円滑に動くよう機能することであり、その役割を果しさえすれば、その人間の本性といった実質的な部分は問題にならない。社会の規則が絶対であり、それによって生ずる関係が絶対である限り、形相は充分保証されたものとなっているからである。

これを逆の見方をすれば、関係が絶対であればあるほど、その社会は個人をその大系内の特定の位置に固定しようとする、ということになるだろう。夫が浮気をしていると思い込んでいる Adriana は、自分の口から、また召使いの Dromio 兄の口を通して幾度も「家に帰って」と繰り返す。つまり夫が夫としての義務を果たすこと、その義務を果たすべき場所に居ることを何度も要請する。そして、これは勿論、双子の混同のためなのだが、夫は頭がおかしくなって自分の言うことを聞いてくれなくなったと思った時、彼を縛って家に閉じこめておこうとする。先の警吏を評した Dromio 弟のセリフにも見られるように、この劇においては「縛る」をあらわす “bond” ないし “band” という語には「契約」の意味がかけられていることに注意しなければならない。Ephesus 社会では個々人は契約を結ぶことによって関係の網の目の中の一定した位置、つまり役割を得る。夫としての義務を果たさない Antipholus 兄は、この網の目からはみ出しているわけで、「縛る」とは、すなわち、彼をもう一度契約関係の大系の中に組み入れるための象徴的行為なのである。

関係の網の目からはみ出した存在は大系を混乱させる危険分子であり、Ephesus 社会はこれを縛り定位置化しなければならない。が、この劇の主人公である二組の双子とその両親があらわしているのは、まさにそのような力を乱す力なのである。Ephesus が固定化する社会なら、彼らは「さまよう」点に特徴がある。劇の冒頭で Egeon が語るのは Dromio 兄弟を含む彼の一家が海で遭難し、ついに別れ別れになってしまったという「漂流」の物語、あるいは兄を求めて Antipholus 弟が、かつ Egeon 自身がさまざまな地を「放浪」したことの物語である。人違いされて家に入れてもらえない Antipholus 兄は友人と町を「うろつき」、また自分を捕えようとする妻から逃げ回る。弟の方も Dromio 兄弟も宿へ港へと町中をめまぐるしく「移動」する。第五幕では夫を町はずれの修道女院に追い込んだはずなのに、その彼が全く別な場所から現われ、Adriana を驚かす場面がある。勿論、もう一人の Antipholus が出てきただけの話なのだが、そうとは知ら

ぬ妻はこの神出鬼没さに

witness you

That he is borne about invisible. . . (V. i. 186-187)

と叫んでしまう。こうした双子のせわしない移動、とらえどころのなさは、彼らが関係性のネットワークから逸脱していることをあらわしている。Ephesus に Antipholus 兄と Dromio 兄しか居なかった時は、彼らは大系内に揺ぎない位置をしめていた。ところが顔も服装も同じ弟たちが、しかも Egeon によれば「末っ子ながら長男として育てた」(My youngest boy, and yet my eldest care (I. i. 124)) という取り換え可能な同類項の出現と同時に、欲する欲しないにかかわらず、彼らは定位置を失い、関係性のネットワークからさまよい出し始めた。この劇の眼目である混乱とは関係性の混乱であると言えるだろう。

「さまよう」という意味は意外なところにも隠れている。この劇の底本となった『メナエクス兄弟』では、双子の混同をさけて兄に Surreptus, 弟に Sosicles という名称が与えられている。『間違いの喜劇』の四つ折判をみると Antipholus 兄に Surreptus の名称が用いられており、モデルになった人物の名をそのまま踏襲していることがわかる。<sup>3)</sup>ところが、メナエクス弟にあたる Antipholus 弟には作者はなぜか Sosicles ではなく Erotis ないし Eroles という名称をあてがった。なぜ名称が変更されたのか、また、この名にこめられた意味は何なのか。これには諸説あり不明の点も多いのだが、どうもラテン語の「さまよう」を意味する“errare”を变形した造語であるという点は間違いのないようだ。言葉の重層的な使い方を得意とした Shakespeare だから Erotis, Eroles にこめられた意味を「さまよう」一つに限定することはないが、しかし名称の変更をこの劇を貫く一つの発想の線上にとらえることは十分可能ではないだろうか。

しかも“errare”は劇の題名にある“error”の語源であり、実際“error”には「さまようこと・漂流」の意味がある。すなわち、この劇のタイトルは「さまようことの喜劇」ともとることができる。さまようことによって、

と言うよりそれと同時発生的に関係性の大系が乱れ、人違いや間違いが生じたのであれば「さまようこと」は「間違いこと」だとも言えるだろう。この劇にあっては、“error”という語は地口的に二つの現象の不可分な関係を暗示しているのである。

『間違いの喜劇』は「さまようこと」、つまり関係性の大系からの逸脱を描いており、その喜劇性は「さまよう」という状況から生み出される。今みた「間違えること」はその喜劇性を構成する要素の一つではあるが、しかし「さまようこと」と結びついているのはこれだけではない。恐らくこの点を探る上で、最上の手掛りとなるのは、「さまよう」を表す語群の中でも“lose”という語ではないだろうか。

*Syr. Ant.* Farewell till then: I will go lose myself,

And wander up and down to view the city.

*First Mer.* Sir, I commend you to your own content. *Exit.*

*Syr. Ant.* He that commends me to mine own content

Commends me to the thing I cannot get.

I to the world am like a drop of water

That in the ocean seeks another drop,

Who, falling there to find his fellow forth,

(Unseen, inquisitive) confounds himself.

So I, to find a mother and a brother,

In quest of them, unhappy, lose myself. (I. ii. 30-40)

ここはこの劇で最も重要な水滴の比喩がでてくる箇所として幾度も引用された、いわば出だしの感どころに当るのだが、ここに“lose”が二度でてくるのはやはり意味がある。ここでは「あてもなくさまよう」の意味で使われているが、それは同時に「失う」と関係があるのだ。まず、それは財産を失うことを意味する。Ephesusの人間は契約による関係性のネットワークの中に生きており、この契約によって財産を築き維持している。ということは「さまようこと」によって、この契約の大系からはずれると財は「失われる」、少なくとも極めて不安定な状態になるだろう。この劇の多



くの登場人物が金銭を失うという不安を覚えるのは恐らくこのためである。Antipholus 兄に首飾りを作った Angelo、彼に金を貸した商人、娼婦、また間違って Ephesus 社会に組み込まれた Antipholus 弟も、人違い、つまり「さまようこと」、関係の網の目からの逸脱が原因で金銭や金目の物を、「失い」そうになる。ここまでくると、「さまよい」かつ他を「さまよわせる」のは双子たちだけでなく、Ephesus 全体がそのような存在と化すことになる。大系の一部の混乱は「間違っ」、失う」という行為を通じて全体に波及するのである。

「失う」とはまた「アイデンティティーを失う」ということでもある。Ephesus の人々が形相化され、関係として存在する傾向にあることは先に述べた。各人が個として確立した存在であるなら、関係性を失ってもアイデンティティーの混乱は起きにくいはずだが、そうした本質的な部分は軽視され、個としての存在はかなりの部分を関係性によって支えられている。とすれば、関係性の網の目からはみ出ると、たちまち自分の存在があやうくなるわけだ。

*Syr. Dro.* Do you know me sir? Am I Dromio? Am I your man? Am I myself?

*Syr. Ant.* Thou art Dromio, thou art my man, thou art thyself.

*Syr. Dro.* I am an ass, I am a woman's man, and besides myself. (III. ii. 72-77)

この二人の掛け合いはアイデンティティーの混乱をコミカルにあらわしているだろう。弟のロバになるという感覚とパラレルな意識がみられることから、Dromio 兄も同じ状態に陥っていることがわかる。

*Eph. Ant.* I think thou art an ass.

*Eph. Dro.* Marry, so it doth appear  
By the wrongs I suffer and the blows I bear;  
I should kick, being kick'd, and being at that pass,

You would keep from my heels, and beware of an ass.

(III. i. 15-18)

Antipholus 弟は Luciana に求愛するが、彼を姉の夫と思っている彼女に諫められ、

Against my soul's pure truth, why labour you  
To make it wander in an unknown field?  
Are you a god? would you create me new?  
Transform me then, and to your power I'll yield.

(III. ii. 37-40)

と言い、あるいは

Known unto these, and to myself disguis'd... (II. ii. 214)

と一人ごちる。Antipholus 兄はこれら三者より自己のアイデンティティーに確信を持っているようだが、他人の目からみると決して確固たるものではない。彼や彼の妻が語る混乱の物語を聞いて公爵は、

I think you all have drunk of Circe's cup... (V. i. 271)

と叫ぶ。オデュッセウスの部下を豚に変えたサーシーの酒を飲んだのは、Antipholus 兄だけではない。公爵は Ephesus の人全てがそうだと知っているのだ。次の例では Adriana と Luciana と Antipholus 弟のアイデンティティーが入り乱れる。

*Luc.* Why call you me love? Call my sister so.

*Syr. Ant.* Thy sister's sister.

*Luc.* That's my sister.

*Syr. Ant.* No,

It is thyself, mine own self's better part,  
Mine eye's clear eye, my dear heart's dearer heart,  
My food, my fortune, and my sweet hope's aim,  
My sole earth's heaven, and my heaven's claim.

*Luc.* All this my sister is, or else should be.

*Syr. Ant.* Call thyself sister, sweet, for I am thee...

(III. ii. 59-66)

関係性の破綻から Ephesus の人々のアイデンティティーはなし崩しにされていく。それは海の中で形を失う水滴というこの劇の支配的な比喩が示す状態に他ならない。

「さまよう」とは既存のシステムを逸脱する行為であり、システムを構成する個の、一見確立されたものと思えるアイデンティティーが幻想であることを暴露し、個を支えていたはずの法と、それから生まれる関係の絶対性を宙づりにしてしまう。けれども「さまようこと」が持っているのは否定的な力だけではない。単に否定的な力であれば「さまよう」ことで、アイデンティティーを失った双子たちは自我が崩壊してしまうだろう。が、実際、彼らを襲うのは変身・生まれ変わるという感覚であり、元のアイデンティティーは失われるけれども、それは彼らの崩壊にはつながらない。変身とはアイデンティティーの流動現象である。兄と弟、姉と妹の立場が互いに他へずれこみ、あるいは人間以外の何物かにアイデンティティーが流出する。この流動性は古い関係態にとっては破壊的だが、逆にまた新しい関係性を模索する運動とも考えられるだろう。例えば、元の関係態においては Antipholus 兄と Luciana の結びつきはありえないが、「さまよい」の状態では弟が彼女に求愛する場面にみられるように、Luciana と義兄という、このありえない関係が生ずる。あるいは Dromio 兄と料理女の夫婦関係に弟がずれこみ、これもまたありえない関係が誕生する。これが現実化するかどうかは別にして、少なくとも今まで存在しなかった人間関係が流動性の中で生ずることは確かだ。つまり、この流動性は破壊する力であると同時に、新しい関係性の可能性を生み出す運動でもある。「さまよう」とは、それ故両義的であり、この劇が混乱に終わらず、双子のアイデンティティーが確認され、Ephesus が新たな秩序へと向かうのは、「さまようこと」が持つ再生への力が前景化されてくるからである。ここに「さまようこと」の今一つの意味がでてくる。

But here must end the story of my life,  
And happy were I in my timely death,

Could all my travels warrant me they live. (I. i. 137-139)

これは Egeon の放浪の物語の締めくくりだが、最終行の“travel”は彼の「さまよい」を表すと同時に“travail”「お産」でもある。この二つの語は元は同じ一つの語からできたもので、Shakespeareの時代では両者は区別されていなかった。同様の例が、今度は双子の正体が確認されてむかえる大団円で Emilia のセリフにみられる。

Thirty-three years have I but gone in travail  
Of you, my sons, and till this present hour  
My heavy burden ne'er delivered.  
The duke, my husband, and my children both,  
And you, the calendars of their nativity,  
Go to a gossips' feast, and joy with me,  
After so long grief, such felicity. (V. i. 400-406)

Egeon の旅も先の引用の直前で“labour”と表現されているが (I. i. 130), これも彼らの放浪が同時に出産であることを示唆するだろう。アジアのはてまで旅をした Egeon が死刑の宣告を受け、けれども一日限りの猶余を与えられるという一幕一場の緊迫感は、ここで魔法のように出産前の緊迫感にすり変わる。そして、一家が再会し、混乱が解決される時、つまり、「さまよい」が終結する時、それは無事出産が終わる時でもあるのである。

勿論、双子の再生は Ephesus 全システムの再生を余儀なくする。『間違いの喜劇』は古い関係態が崩れ、新しい関係態が誕生するまでの、いわば再生劇だと言えるだろう。第五幕で修道女院院長 Emilia は Adriana に夫の乱心の理由を問うと、浮気が原因という答が返ってくる。

*Abbess.* You should for that have reprehended him.

*Adr.* Why, so I did.

*Abbess.* Ay, but not rough enough.

*Adr.* As roughly as my modesty would let me.

*Abbess.* Haply in private.

*Adr.* And in assemblies too.

*Abbess.* Ay, but not enough.

*Adr.* It was the copy of our conference ;  
 In bed he slept not for my urging it,  
 At board he fed not for my urging it ;  
 Alone, it was the subject of my theme ;  
 In company I often glanc'd at it ;  
 Still did I tell him it was vile and bad.

*Abbess.* And thereof came it that the man was mad.

The venom clamours of a jealous woman

Poisons more deadly than a mad dog's tooth. (V. i. 57-70)

Emilia の質問はまさに狡猾というにふさわしい。彼女の目的は Adriana のある側面、夫を定位置に抑えつけようとする欲望をひきずり出し、これに強烈な否定をつきつけることである。夫を縛り家に閉じ込めておこうとする Adriana を拒絶するとは、古い関係態を象徴的に拒絶することではないだろうか。これは新しい関係態を生む前の儀式のようなものである。そして混乱が終わり、父の科料を払おうとする Antipholus 兄に公爵が、

It shall not need, thy father hath his life. (V. i. 390)

と言う時、あれほど Ephesus の人々が忠実だった法は効力を失い、新たな関係態の形成が始まる、少なくともその予感が与えられるのである。再生という喜ばしさ、これがアイデンティティの混乱のおかしさと並んで、この劇の喜劇性を構成する要素なのである。

『間違いの喜劇』にあるのは二つの力だ。一つは関係態という暴力を背後に秘めた束縛する力であり、もう一つはそのような定位置化を脱け出し、同時に新たな差異と対立の体系を形成する「さまよい」の力である。Ephesus が詐欺師に満ち、肉体を変形する魔女がいるという評判をとっているところをみると (I. ii. 95-105)、ここでは幾度も「さまよい」の状態が発生したに違いない。我々はこの周期的な運動のワン・サイクルを目撃した

のである。

恐らく Ephesus にはいずれ新たな関係態が確立されるだろう。けれども劇としての『間違いの喜劇』はそのようなヴィジョンを与えて終わるわけではない。Dromio 兄弟はどちらが先に修道女院に入るかで譲り合う。劇はこの譲り合いに結着をつける兄の言葉で終幕を迎える。

Nay then, thus:

We came into the world like brother and brother,  
And now let's go hand in hand, not one before another.

(V. i. 423-426)

「さまよい」は終わった。けれども序列も区別も未だついてはいない。ここにあるのは二つの力のはざまにあるユートピア的と言ってもいい一瞬である。そしてこの希有の、けれども確かな形を与えられた瞬間こそ『間違いの喜劇』が我々に与える最終的ヴィジョンなのである。

#### 註

- 1) 引用は全て *The Arden Shakespeare: The Comedy of Errors*, ed. R. A. Foakes (Methuen, 1984) による。
- 2) 筆者は未見だが、Peter Alexander の指摘であると、Harold Brooks “Themes and Structure in *The Comedy of Errors*,” *Shakespeare: The Comedies*, ed. Kenneth Muir (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1965), p. 19. に紹介がある。
- 3) Surreptus とは “snatched away” という意味であり Antipholus 兄がよそから取ってこられ、Ephesus に付け加えられた余剰であることを暗示する。現在はシステム内に定位置を保っているが、実はそこに正当な起源をもたぬ故、いつシステムを乱すかも知れない力をもつ。双子の名称はいずれもシステムに対する異分子性、余剰性を表現しているのではないだろうか。なお、Errotis, Erotos の名称の問題に関しては、すでにあげた Arden 版のテキストの序 (pp. xxvi-xxvii) に Foakes による簡潔なまとめがある。